

文学部通信教育課程

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

文学部通信教育課程は、各学科の専門性を身につけるだけでなく、学問的成果を説得力ある文章にする力を身につけることに重点を置いている。学習質疑制度やスクーリングでの学習指導、さらに地理学科では「現地研究」などを行い、多くの人的資源を割いて指導を行っている。これらは教育の質を保証する上で意義ある取り組みではあるが、実施主体となっている学部にとって大きな負担であろう。メディアスクーリングなどの拡大により、教育の質を保持したまま、負担を軽減していくことが望まれる。

また、こうした指導の成果である優秀な卒業論文を学内誌で発表させることは、学習成果の可視化という点で意義あることであるが、地理学科がすでに取り組んでいるように、それを学内だけでなく、学外の研究会でも発表させることは、社会連携・社会貢献という点からも意義あることであり、今後さらなる拡大と成果が期待される。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

通信教育課程の設置にともなう教員負担を軽減することは難しい。指摘のあったメディアスクーリングは充実した教育機会を提供するうえで重要であり、2019年度も拡充に努めた。だが、授業の収録、レポート添削等にかかる負担は大きく、専任教員だけでなく、兼任講師の協力も仰ぎながら実施している。

学修成果の可視化という観点から、優秀な研究を行った学生の学外学会における発表の推進を期待するとの指摘を受けたが、学部レベルでも参加可能な場の有無は学問領域によって異なるため、文学部全体として速やかにこれを改善することは難しい。しかし、通信教育課程各学科の卒業生からは、毎年継続的に大学院へ進学者があるため、そうした着眼による成果の把握・可視化は可能である。今後検討していく予定である。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

2019年度の文学部通信教育課程の評価結果への対応について、担当教員の負担は、文学部通信教育課程が抱える大きな問題の一つである。通信教育課程では、レポート添削やスクーリングを行いつつ、学生の学習支援もするため、通学課程とは異なる教員の負担がある。指摘されたメディアスクーリングの拡充も望まれるが、その映像収録も担当教員には大きな負担になる。したがって、これは通信教育課程のみで考えるのではなく、文学部全体で平準化を図るべきである。

学修成果の可視化という観点で、優秀な研究を行った学生の学外学会における発表の推進を期待するとの提言については、今後検討していく予定とのことであるが、優秀な卒業論文を学内誌に掲載することでも、学外に公表したのと同等で、学習成果の可視化は行われていると言える。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

各学科とも教育課程の編成・実施方針にもとづき、適切な教育課程・教育内容を提供している。すなわち、専門教育課程では学科の専門領域に関する基礎的な知識の涵養から、具体的な研究テーマに対する深い考察まで、幅広くかつバランスよく学べる教育課程を設けている。また、卒業論文を必修とし、研究の成果を的確に文章化する力や、自ら課題を設定して主体的に研究する力の育成を重視している点も、学科共通の教育課程の特徴としてあげることができる。加えて、3学科とも教員免許状取得に必要な教育課程を編成している（地理学科ではさらに測量士補の資格取得が可能である）。一方、専門教育課程に加え、一般教育・外国語・保健体育から成る教養課程を設け、幅広い教養と視野を身につけることにも力を入れている。通信教育課程の各科目は通信科目・スクーリング科目として開講されており、学生の置かれた環境と各科目形態の利点を踏まえた、効果的な学修が可能となるよう配慮されている。

なお、上記以外の各学科の教育課程・教育内容の特徴は以下のとおりである。

【日本文学科】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

「日本文芸学概論」「日本語学概論」等の必修科目に加え、「日本文芸研究特講」16科目から成る選択必修科目を通じて、日本文学・日本語学の各領域を学び、「中国文芸史」「日本芸能史」「日本美術史」等の選択科目を通じて、日本文学に隣接する諸分野についても学べる教育課程となっている。文学・言語・芸能文化の3コース制をとり、卒業論文までの道のりを3つのモデルコースとして示している点も特徴である。

【史学科】

「日本史概説」「東洋史概説」「西洋史概説」「史学概論」を必修科目とし、専門科目の学習段階の初期に広く歴史学にアプローチする機会を設けている。また、このうち「史学概論」を除く概説3科目と「史学演習」をスクーリング選択必修科目としている。選択科目は、各分野から1科目以上50単位の修得を定めている日本史・東洋史・西洋史の各分野の科目群や、「日本考古学」「歴史資料学」等から成り立っている。

【地理学科】

「人文地理学概論(1)」「自然地理学概論(1)」「地理調査法(人文編)」「地理調査法(自然編)」を必修科目とし、基礎的な知識と調査方法を学ぶ場を設けている。また、スクーリング必修科目として「現地研究」等を設け、実地の調査にも力を入れている。選択必修科目では、人文地理、自然地理、地誌・その他の各分野より2科目8単位以上履修するものとし、選択科目では歴史学や経済学等に関わる科目群を配当し、幅広い分野をバランスよく学習することができる教育課程を構築している。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

各学科の学科会議においてカリキュラムの検討を行った。その結果、科目名称の変更等の方式により、以下のとおりの改正が行われ、2019年度からのカリキュラムの充実化を図ることができた。

- ・史学科「日本史特講(対外関係史)」の新設

このほか、日本文学科では、文学・言語・芸能文化の各コースにおける卒業論文までの道のりを示すため、『学習のしおり』の教育課程表(カリキュラム表)に独自の工夫を加えた。具体的には、各コースの教育課程表に示された科目のうち、当該コースにおいて履修が推奨される科目に記号をつけることにより、学生が学びたい分野をより体系的に学習できるよう配慮した。

なお、2019年度は第2回通教関連学科連絡会議において、通信教育部事務部より学生の退学・休学状況についての報告を受け、適切な学修支援こそが状況の改善に資することを確認した。これを受け、具体的な支援内容として、Web学習サービスへの模範レポートの掲載(日本文学科)、レポート課題や試験出題の適切性・難易度の再検討(史学科)、教科書改訂やメディアスクーリングの充実(メディアスクーリングで掲載している模範レポートの閲覧拡大を含む)及びGIS学術士の資格取得に向けた対応(地理学科)といった方策の実施を各学科にて図るとともに、第3回通教関連学科連絡会議においてその進捗状況を報告し、学科間での情報共有を行った。

【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

- ・『学習のしおり』
- ・日本文学科カリキュラムマップ
(<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/common/doc/faculty/japanese-literature/subject/curriculum-map.pdf>)
- ・日本文学科カリキュラムツリー
(<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/common/doc/faculty/japanese-literature/subject/curriculum-tree.pdf>)
- ・史学科カリキュラムマップ
(<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/common/doc/faculty/history/subject/curriculum-map.pdf>Date=20200220)
- ・史学科カリキュラムツリー
(<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/common/doc/faculty/history/subject/curriculum-tree.pdf>Date=20200220)
- ・地理学科カリキュラムマップ
(<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/common/doc/faculty/geography/subject/curriculum-map.pdf>Date=20190314)
- ・地理学科カリキュラムツリー
(<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/common/doc/faculty/geography/subject/curriculum-tree.pdf>Date=20190314)
- ・2019年度第7回文学部定例教授会議事録
- ・2019年度第2・3回通教関連学科連絡会議議事録

②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。

S A B

※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修(個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ(必修・選択等)含む)への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

各学科とも、カリキュラムの順次性を意識し、年次ごとの科目配置を適切に行っている。すなわち、教養課程の諸科目を1年次より履修可能とし、大学生として必要な幅広い知識の習得を促している。一方、専門教育課程では1年次に概論を中心に配置し、年次進行に即してより高度な科目を配置し、4年次の卒業論文につなげている。

なお、各学科のカリキュラムの順次性・体系性の特徴は以下のとおりである。

【日本文学科】

必修科目では、「日本文芸学概論」「日本語学概論」を1年次より、「文学概論」「日本文芸史Ⅰ・Ⅱ」を2年次より履修可能としている。選択必修科目では、「日本文芸研究特講」6科目を1年次より履修可能とし、学生が興味・関心に適った科目を早期に履修できることとしている。「日本文芸研究特講」10科目は2年次以降の配当とし、さらに選択科目の諸科目は2年次ないし3年次以降の配当とする。なお、1年次より「論文作成基礎講座Ⅰ・Ⅱ」を開設し、レポート・論文の作成に必要な文献検索、文章技法に特化した教育も行っている。

【史学科】

必修科目では、「日本史概説」を1年次より、「東洋史概説」「西洋史概説」「史学概論」を2年次より履修可能としている。選択科目では「日本考古学」「歴史資料学」等を2年次より、その他の科目を3年次より履修可能としている。各科目は、概説・概論系、講義系、特講系、演習系、実習系と、専門性に応じた段階的設定とし、順次性と体系性を重視したカリキュラムを構築している。なお、日本史・東洋史・西洋史の3分野が開講されているスクーリング選択必修科目「史学演習」は専門性が高いため、同分野の概説科目の単位を修得済みであることを受講資格としている。

【地理学科】

必修科目では、「人文地理学概論(1)」「自然地理学概論(1)」「地理調査法(人文編)」「地理調査法(自然編)」を1年次より履修可能としている。選択必修科目の科目群は人文地理、自然地理、地誌・その他の各分野に分かれ、2年次ないし3年次より履修可能としている。学生はこれらの科目の履修を通じて各分野の知識を幅広く習得し、3年次にはスクーリング必修科目「現地研究(人文)」「現地研究(自然)」等を通じて、現場でしか得られない知識・技能の習得に力を入れる。

【2019年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・『学習のしおり』『通信学習シラバス・設題総覧』

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。

- ・年度初めに『学習のしおり』を学生へ送付し、単位修得、教材、カリキュラム、学習システム等の詳細を通知している。
- ・通信科目については、年度初めに『通信学習シラバス・設題総覧』を学生へ送付し、テキスト、シラバス、レポート課題、単位修得試験の出題範囲を明示し、履修にあたっての参考情報を提供している。
- ・スクーリング科目については、毎月『法政通信』を学生へ送付し、シラバスを明示し、履修にあたっての参考情報を提供している。
- ・毎年度4月・10月に「初学者向け事務ガイダンス」を実施し、通信教育部の学習の仕組み全般について周知を行っている。

【日本文学科】

・日本文学科公式サイトに「新カリキュラムについて」というコーナーを設置して、2013年度から始まった新カリキュラムの意義や履修上の注意点等に関する説明を動画配信している。

http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page_id=1848

【2019年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『学習のしおり』『通信学習シラバス・設題総覧』『法政通信』(シラバスは「webシラバス(講義概要)」でも公開)
- ・<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/support/learn-support/guidance/>

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

※取り組み概要を記入。

通常の学習指導は学習ガイダンスの形式をとり、教員・職員・卒業生によって行われている。その種類と時期は以下のとおりである。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・初学者向け事務ガイダンス（4月、10月）
 ・卒業生による学習体験の講演＋卒業生個別相談（5月、11月）
 ・各学科担当教員による、学習活動方法の講演（6月、12月）
 また、通信教育課程の特性を生かし、学習質疑制度（郵便）を通じて、科目担当教員による学習指導が行われているほか、Web通信学習相談制度を通じて、通信学習相談員（卒業生）による学習指導も行われている。
 一方、スクーリング期間中には、オフィス・アワーと授業の前後の時間を通じて、教員による学習指導が行われている。特に、地理学科の「現地研究」は2泊3日で行われるため、学習指導の重要な機会となっている。また、メディアスクーリングでは、ディスカッション機能・質疑応答機能を通じ、科目担当教員による学習指導が行われている。
 卒業論文の執筆にあたっては、夏期および冬期スクーリング期間中に一般指導が行われている。また、日本文学科では1次指導（文書）、2次指導（面接）、史学科・地理学科では1次指導（文書）、2次指導（面接）、3次指導（文書）が担当教員により行われている。

【2019年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
 特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
 ・『学習のしおり』『法政通信』
 ・<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/support/learn-support/guidance/>
 ・<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/system/graduation-thesis/>

1.3 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。 S A B

【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。
 ・全学共通の成績評価基準を教員・学生へ周知し、各教員はそれにもとづき、成績評価を行っている。
 ・学科会議において、各学生の卒業時の成績を確認している。
 ・成績評価と単位認定において問題が生じた際には、学科会議で検討している。また、必要に応じて兼任講師とも連携をとり、問題の解決にあたる体制を整えている。
【地理学科】
 ・卒業論文については、複数の教員で面接試問を行い、そのうえで成績評価・単位認定を全教員で行い、その適切性を確認している。

【2019年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
 特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
 ・『学習のしおり』

1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。 はい いいえ

※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。
 ・進級の状況については、毎年度、9月と3月の学科会議と教授会で確認のうえ、承認している。
 ・成績分布の状況については現在のところ、定期的に確認する手続きを導入していない。ただし、通信教育部事務局より問題が提起された際には、学科会議においてこれを検討する体制となっている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
 ・2019年度第5・10回文学部定例教授会議事録

②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。 S A B

※取り組みの概要を記入。
 文学部では、各学科の専門分野における研究方法の習得と、それにもなう課題発見・解決力、思考力、調査力、また、それらを説得力をもって発信するための文章力を有する学生に対し、学位を授与する方針をとっている。そのため、「卒業論文」を必修科目とし、論文に必要な要件を定め、その評価を通じ学習成果を測定している。

【2019年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
 特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

| | |
|---|---|
| ・『学習のしおり』 | |
| ③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。 | S <input checked="" type="checkbox"/> A B |
| <p>※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。</p> <p>各学科とも、学習成果の把握・測定は卒業論文審査を通じて行っている。卒業論文面接試問を行ったあと、学科でその内容を評議し、優秀な論文については各学科において、以下のように公表を行っている。</p> <p>【日本文学科】 指導教員による推薦を経て、法政大学国文学会の機関誌『日本文学誌要』に掲載している。</p> <p>【史学科】 指導教員による推薦を経て、法政大学史学会の機関誌『法政史学』に掲載している。</p> <p>【地理学科】 法政大学地理学会による「法政大学地理学術大会」での口頭発表・ポスター発表や同学会の機関誌『法政地理』への掲載を積極的に行うよう指導している。また、例年3月に開催される全国地理学専攻学生「卒業論文発表大会」（日本地理教育学会主催）において、法政大学地理学科通信教育課程学生代表として発表するよう指導している。</p> <p>【2019年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『日本文学誌要』（法政大学国文学会） ・『法政史学』（法政大学史学会） ・『新地理』（日本地理教育学会） ・日本地理教育学会ウェブサイト（http://www.geoedu.jp/） ・『法政地理』（法政大学地理学会） ・『学会ニュース』（法政大学地理学会） ・法政大学地理学会ウェブサイト（http://www.chiri.info/）</p> | |

(2) 長所・特色

| 内容 | 点検・評価項目 |
|---|---------|
| ・学部および各学科の PDCA サイクルが円滑に機能し、カリキュラムの点検を不断に行い、教育改善に努めている。 | 1.1① |
| ・各学科とも学内学会、学会誌を有し、通信教育課程に所属する学生の成果も積極的に発表している。 | 1.4③ |

(3) 問題点

| 内容 | 点検・評価項目 |
|-------|---------|
| ・特になし | |

【この基準の大学評価】

| |
|--|
| <p>文学部通信教育課程では、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されている。卒業論文を必修とし、研究の成果を的確に文章化し、自ら課題を設定して主体的に研究する力の育成を重視している。そうした能力育成のために必修科目や選択必修科目、専門科目が過不足なく提供されており、順次性・体系性を備えたカリキュラムが確保されている。また教員免許、測量士補取得のための教育課程も設置している。</p> <p>履修では、年度初めに『学習のしおり』、『通信学習シラバス・設題総覧』、『法政通信』による情報提供を行い、さらに年2回「初学者向け事務ガイダンス」を行って適切な指導を行っている。学習面では、教員・職員・卒業生によるガイダンスや個別相談、講演のほか、科目担当教員による学習質疑制度、通信学習相談員による web 通信学習相談制度、スクーリング時の対面指導、メディアスクーリングを通じて、適切な指導が行われている。学習指導改善のため、模範リポートの提示、課題や試験の難易度の検討、教科書改訂、メディアスクーリングの充実、GIS 学術士取得に向けた対応を行った点は高く評価できる。</p> <p>教員・学生に成績評価基準を周知し、卒業時の成績確認や問題発生時には学科会議が適切に対応している。しかし、進</p> |
|--|

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

級状況は学部・学科で把握しているが、成績分布については事務から問題が提起された場合を除き、定期的な確認を行っていない。この点は今後の改善が期待される。

「卒業論文」に必要な要件を定め、その評価を通じて、学習成果を測定している。学習成果を把握・評価するための具体的な取り組みとして、優秀な卒業論文は学内誌に掲載している。各学科で学内学会、学会誌を有しており、通教学生にも発表の機会が提供されていることは評価できる。

地理学科では、優秀者に全国大会での発表の機会を与え、学習のモチベーションを高める工夫は評価できる。

III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

| No | 評価基準 | 教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】 | | | | | | | |
|----------------|---|--|----------------|--|------|---|----|---|-----|
| 1 | 中期目標 | 体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。 | | | | | | | |
| | 年度目標 | 各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。 | | | | | | | |
| | 達成指標 | カリキュラム、教育内容を検証するための学科会議を開催する。 | | | | | | | |
| | 年度末報告 | <table border="1"> <tr> <td colspan="2">教授会執行部による点検・評価</td> </tr> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>各学科の学科会議において、カリキュラム、教育内容を検証した。その結果、第7回教授会において、史学科のカリキュラムの一部改正を行った。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </table> | 教授会執行部による点検・評価 | | 自己評価 | A | 理由 | 各学科の学科会議において、カリキュラム、教育内容を検証した。その結果、第7回教授会において、史学科のカリキュラムの一部改正を行った。 | 改善策 |
| 教授会執行部による点検・評価 | | | | | | | | | |
| 自己評価 | A | | | | | | | | |
| 理由 | 各学科の学科会議において、カリキュラム、教育内容を検証した。その結果、第7回教授会において、史学科のカリキュラムの一部改正を行った。 | | | | | | | | |
| 改善策 | — | | | | | | | | |
| 2 | 中期目標 | 学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、スクーリング科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。 | | | | | | | |
| | 年度目標 | 講義科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例に関する情報を共有する。 | | | | | | | |
| | 達成指標 | 教授会において情報共有の機会を設ける。 | | | | | | | |
| | 年度末報告 | <table border="1"> <tr> <td colspan="2">教授会執行部による点検・評価</td> </tr> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>2019年11月27日に通学課程の学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、リアクションペーパーの活用事例・課題に関する聞きとりを行った。その結果を第11回教授会で報告し、リアクションペーパーの効果的な活用法について情報を通信教育課程担当教員間でも共有した。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </table> | 教授会執行部による点検・評価 | | 自己評価 | A | 理由 | 2019年11月27日に通学課程の学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、リアクションペーパーの活用事例・課題に関する聞きとりを行った。その結果を第11回教授会で報告し、リアクションペーパーの効果的な活用法について情報を通信教育課程担当教員間でも共有した。 | 改善策 |
| 教授会執行部による点検・評価 | | | | | | | | | |
| 自己評価 | A | | | | | | | | |
| 理由 | 2019年11月27日に通学課程の学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、リアクションペーパーの活用事例・課題に関する聞きとりを行った。その結果を第11回教授会で報告し、リアクションペーパーの効果的な活用法について情報を通信教育課程担当教員間でも共有した。 | | | | | | | | |
| 改善策 | — | | | | | | | | |
| 3 | 中期目標 | 学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。 | | | | | | | |
| | 年度目標 | 「学習成果の測定」に関する定義、先行事例、課題について情報を共有する。 | | | | | | | |
| | 達成指標 | 教授会において研修会を開催する。 | | | | | | | |
| | 年度末報告 | <table border="1"> <tr> <td colspan="2">教授会執行部による点検・評価</td> </tr> <tr> <td>自己評価</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>第5回教授会において、安孫子信教授、小原文明准教授による研修会「学修成果の把握について」を実施した。 2019年11月27日に通学課程の学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、学修成果の把握方法に関する意見・要望を聞きとりを行った。その結果を第11回教授会で報告し、通信教育課程担当教員間でも情報を共有した。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </table> | 教授会執行部による点検・評価 | | 自己評価 | S | 理由 | 第5回教授会において、安孫子信教授、小原文明准教授による研修会「学修成果の把握について」を実施した。 2019年11月27日に通学課程の学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、学修成果の把握方法に関する意見・要望を聞きとりを行った。その結果を第11回教授会で報告し、通信教育課程担当教員間でも情報を共有した。 | 改善策 |
| 教授会執行部による点検・評価 | | | | | | | | | |
| 自己評価 | S | | | | | | | | |
| 理由 | 第5回教授会において、安孫子信教授、小原文明准教授による研修会「学修成果の把握について」を実施した。 2019年11月27日に通学課程の学生モニターを対象とするヒアリングを実施し、学修成果の把握方法に関する意見・要望を聞きとりを行った。その結果を第11回教授会で報告し、通信教育課程担当教員間でも情報を共有した。 | | | | | | | | |
| 改善策 | — | | | | | | | | |
| 4 | 評価基準 | 学生の受け入れ | | | | | | | |
| | 中期目標 | 各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の入試制度を維持するとともに、 | | | | | | | |

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

| | | | |
|-----|-------|---|---|
| | | その発展をめざし、検証と見直しを進める。 | |
| | 年度目標 | 専門分野に対する関心と、大学での学習に意欲をもつ学生をより適切に受け入れるために、出願時に提出を求める「志願書2」の課題設定の検証を行い、必要に応じて修正を施す。 | |
| | 達成指標 | 学科会議において左記の検証・審議を行う。 | |
| | 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | | 自己評価 | A |
| | | 理由 | 各学科の学科会議において、「志願書2」の検証を行い、その効果を確認した。その結果、第4回教授会において、2020年度学生募集においても内容を変更しないことを決定した。 |
| | | 改善策 | — |
| No | 評価基準 | 教員・教員組織 | |
| 5 | 中期目標 | 各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。 | |
| | 年度目標 | 年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。 | |
| | 達成指標 | 人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。 | |
| | 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | | 自己評価 | A |
| 理由 | | 第1回人事委員会において、専任教員の年齢構成について確認を行った。 | |
| 改善策 | | — | |
| No | 評価基準 | 学生支援 | |
| 6 | 中期目標 | 卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況をこれまでどおり適切に把握したうえで、卒業保留・留年、休・退学の減少に向けた課題を精査し、教育上の取り組みに反映させる。 | |
| | 年度目標 | 通信教育部事務部の協力を得て、卒業保留、留年、休・退学の現状と理由を調査するとともに、改善に向けた方策を検討する。 | |
| | 達成指標 | 通教関連学科連絡会議を開催し、左記について情報共有を行うとともに、改善の方策について協議する。 | |
| | 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | | 自己評価 | S |
| 理由 | | 第2回通教関連学科連絡会議において、通信教育部事務部より学生の退学・休学状況についての報告を受け、適切な学修支援こそが状況の改善に資することを確認した。これを受け、具体的な支援内容として、Web学習サービスへの模範レポートの掲載（日本文学科）、レポート課題や試験出題の適切性・難易度の再検討（史学科）、教科書改訂やメディアスクーリングの充実（メディアスクーリングに掲載している模範レポートの閲覧拡大を含む）及びGIS学術士の資格取得に向けた対応（地理学科）といった方策の実施を各学科にて図ると共に、第3回通教関連学科連絡会議においてその進捗状況を報告し、学科間での情報共有を行った。 | |
| 改善策 | | — | |
| No | 評価基準 | 社会連携・社会貢献 | |
| 7 | 中期目標 | 社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学習の機会を提供するよう努める。 | |
| | 年度目標 | 社会人へ学習の機会を広げる方策として、通信教育課程のカリキュラムの履修証明プログラムへの活用を他学部と連携して検討する。 | |
| | 達成指標 | 市ヶ谷コミュニティ連携会議（仮称）において、学部長が左記の必要性を指摘し、検討の俎上に載せるようにする。 | |
| | 年度末報告 | 教授会執行部による点検・評価 | |
| | | 自己評価 | B |
| 理由 | | 市ヶ谷コミュニティ連携会議において、学部長が履修証明プログラムにおける通信教育課程の活用の必要性について発言したが、検討にはいたらなかった。 | |
| 改善策 | | 今後も、履修証明プログラムにおける通信教育課程の必要性について、学部長が適切な会議体で発言してゆく。 | |

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

| |
|--|
| <p>【重点目標】</p> <p>〔年度目標〕通信教育部事務部の協力を得て、卒業保留・留年、休・退学の現状と理由を調査するとともに、改善に向けた方策を検討する。</p> <p>〔達成指標〕通教関連学科連絡会議を開催し、左記について情報共有を行うとともに、改善の方策について協議する。</p> |
| <p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>卒業保留・留年、休・退学の現状と理由を調査し、改善に向けた方策を検討することを年度目標に掲げた。これを受け、通信教育部事務部による調査報告にもとづき、各学科で学生の学修活動を促進する具体策が検討され、次年度より実施される見込みとなったことは特筆されると考える。このほか、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織に関する諸項目については、所期の目標が達せられたといえるが、社会貢献・社会連携については十分な成果が得られなかった。</p> |

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

| |
|---|
| <p>文学部通信教育課程の2019年度目標の達成状況に関して、学生支援の年度目標である「卒業保留・留年、休・退学状況を把握し、改善方策を検討する」については、減少に向けた学習指導改善として、各学科が模範リポートの提示（日本文学科）、課題や試験内容の適切さや難易度の検討（史学科）、教科書改訂、メディアスクーリングの充実、GIS 学術士取得に向けた対応（地理学科）を行った点は高く評価できる。</p> <p>一方で、社会人向けプログラム・履修証明プログラムなどの諸制度については、市ヶ谷コミュニティ連携会議で学部長が発言したものの検討には至らなかったため、引き続き実施に向けての検討が期待される。</p> |
|---|

IV 2020年度中期目標・年度目標

| No | 評価基準 | 教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】 |
|----|------|--|
| 1 | 中期目標 | 体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。 |
| | 年度目標 | 各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。 |
| | 達成指標 | カリキュラム、教育内容を検証するための学科会議を開催する。 |
| No | 評価基準 | 教育課程・学習成果【教育方法に関すること】 |
| 2 | 中期目標 | 学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、スクーリング科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。 |
| | 年度目標 | 学生を対象に、アクティブ・ラーニングや双方向型授業の効果・要望を聴き取り、教員間で情報を共有する。 |
| | 達成指標 | 教授会において情報共有の機会を設ける。 |
| No | 評価基準 | 教育課程・学習成果【学習成果に関すること】 |
| 3 | 中期目標 | 学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。 |
| | 年度目標 | 初年次教育を対象に、「学習成果の測定」に関する事例、課題について情報を共有する。 |
| | 達成指標 | 教授会において情報共有の機会を設ける。 |
| No | 評価基準 | 学生の受け入れ |
| 4 | 中期目標 | 各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、検証と見直しを進める。 |
| | 年度目標 | 専門分野に対する関心と、大学での学習に意欲をもつ学生をより適切に受け入れるために、出願時に提出を求める「志願書2」の課題設定の検証を行い、必要に応じて修正を施す。 |
| | 達成指標 | 学科会議において左記の検証・審議を行う。 |
| No | 評価基準 | 教員・教員組織 |
| 5 | 中期目標 | 各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。 |
| | 年度目標 | 年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。 |
| | 達成指標 | 人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。 |

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

| No | 評価基準 | 学生支援 |
|--|------|--|
| 6 | 中期目標 | 卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況をこれまでどおり適切に把握したうえで、卒業保留・留年、休・退学の減少に向けた課題を精査し、教育上の取り組みに反映させる。 |
| | 年度目標 | 前年度、通信教育部事務部の協力を得て行った、卒業保留・留年、休・退学への対応策を実施に移す。 |
| | 達成指標 | 通教関連学科連絡会議を開催し、左記について実施報告を行う場を設ける。 |
| No | 評価基準 | 社会連携・社会貢献 |
| 7 | 中期目標 | 社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学習の機会を提供するよう努める。 |
| | 年度目標 | 社会人へ学習の機会を広げる方策として、通信教育課程のカリキュラムの履修証明プログラムへの活用を他学部と連携して検討する。 |
| | 達成指標 | 市ヶ谷コミュニティ連携会議（仮称）において、学部長が左記の必要性を指摘し、検討の俎上に載せるようにする。 |
| <p>【重点目標】 前年度、通信教育部事務部の協力を得て行った、卒業保留・留年、休・退学への対応策を実施に移す。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 各学科において卒業保留・留年、休・退学への対応策を実施し、その結果を第2回通教関連学科連絡会議で報告する（2021年2月予定）。</p> | | |

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

| |
|--|
| <p>文学部通信教育課程の2020年度目標設定については、教育方法に関して、アクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例を共有するなど適切な目標となっている。学習支援では、卒業保留・留年、休・退学者の減少に向けた対策を実施することで、一定の効果が期待される。メディアスクーリングや教員の負担についても、学部・学科内で議論されることが期待される。</p> <p>昨年度未達成の課題についても、今年度の目標としてその実施や検討が掲げられており、適切かつ具体的な中期・年度目標となっている。</p> |
|--|

【大学評価総評】

| |
|---|
| <p>文学部通信教育課程では、卒業論文を必修とし、研究の成果を的確に文章化し、自ら課題を設定して主体的に研究する力の育成に重点を置いている。web通信学習相談制度、スクーリング時の対面指導、メディアスクーリングを通じて、適切な指導が行われている。学習指導改善のため、卒業保留・留年、休・退学状況を把握し、模範レポートの提示、課題や試験の難易度の検討、教科書改訂、メディアスクーリングの充実、GIS学術士取得に向けた対応を行った点は高く評価できる。成績分布の把握については今後の改善が期待される。</p> <p>「卒業論文」に必要な要件を定め、その評価を通じて、学習成果を測定している。学習成果を把握・評価するための具体的な取り組みとして、優秀な卒業論文は学内誌に掲載するほか、地理学科では、優秀者に全国大会での発表機会を与えている。</p> <p>アクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例を共有するなど適切な教育方法をとっている。メディアスクーリングや教員の負担については、学部・学科内で議論されることに期待したい。また、履修証明プログラム等については、引き続き検討が望まれる。</p> |
|---|

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。